

# 現代アメリカの黒人問題と アンダークラス論争——一つの検討

青木 秀男

## 問題の状況

今、アメリカの黒人問題が、深刻な様相を呈している。一九六四年、ジョンソン政権が成立して、「偉大な社会」(Great Society)をめざす「貧困との戦争」(War against Poverty)が布告された。貧困戦争は、包括的な公民権法(Civil Rights Act)の制定をもって始まった。そして、機会の平等から結果の平等へ、つまり、たんに現在の差別を廃絶するのみならず、過去の差別によって制度化された不平等をも解消するアフターマティブ・アクション政策(積極的是正措置)が、黒人マイノリティの教育、仕事、昇進の機会を創出していった。黒人差別は(他の人種・民族マイノリティへの差別もまた)、確実に廃絶され、世界でもっとも富めるアメリカにふさわしい、差別と貧困のない「偉大な社会」が遠くならず実現されるかにみえた。

ところが、そのような大方の期待とは裏腹に、まもなく一九七〇年代に入り、アメリカ北東部および北中部の大都市圏の産業都市のインナー・シティにおいて、黒人集住地区の社会的混乱(social dislocation)がだれの目にも深刻なものとなっていった<sup>(1)</sup>。インナー・シティで、最下層の黒人たちの失業、貧困、未就学・中途退学、婚外子出産、薬物依存、犯罪、福祉依存などの社会問題が増加していった。他方、中流階級や労働者階級の黒人たちは、荒廃するインナー・シティから相次いで転出し、市街住宅地や郊外に移っていった。それとともに、彼・彼女らを顧客とし、彼・彼女らによって運営されていた学校、教会、病院、店舗などのコミュニティ施設が、機能を停止していった。コミュニティの組織やネットワークや活動が、萎えていった。こうして、インナー・シティには、そこを脱出する術のない最下層の黒人と荒んだコミュニティの景観だけが残されていった。

このような大都市のインナー・シティの社会的混乱が、一九九〇年代の今日に至っている。アメリカは、今、最下層の黒人の社会的混乱と、それとともに、黒人と他の人種・民族集団との葛藤と反目という社会的な分裂に苦悩している(2)。

## 問題の理解

では、このような大都市のインナー・シティの社会的混乱は、どのような背景のもとで生じたのだろうか。社会的混乱は、現代アメリカの人種差別がもたらした結果だろうか、それとも階級状況がもたらした結果だろうか、それは、産業構造の変容がもたらした結果だろうか、それともアフアーマティブ・アクション政策がもたらした結果だろうか。そもそも、インナー・シティの社会的混乱の中心は、失業や貧困などの経済構造に関わる問題なのだろうか、それとも婚外子出産、薬物依存、犯罪などの住民の行動様式に関わる問題なのだろうか。社会的混乱の解決のための社会政策は、差別の廃絶という人種政策の方向で施行されるべきだろうか、それとも階級的不平等の是正という経済政策の方向で施行されるべきだろうか。・要するに、インナー・シティの社会的混乱に

関わる複雑な問題群のなかの何を根本原因とみなし、何をそこから派生する現象とみなすべきだろうか。

今、インナー・シティの最下層の黒人たちの社会的混乱をめぐる議論において、あれこれの言説がたがいに拮抗し、錯綜して、百花斉放の態にある。多くの学者が多くの調査を行ない、多くの論文や著書を出してきた。

なかでも、インナー・シティの最下層の黒人の社会的混乱についていち早く明晰かつ大胆な説明を行なって、論争の口火を切ったのが、シカゴ大学の(黒人)社会学者ウイルソンであった。ウイルソンは、まず『人種の意味の後退』(Wilson, W. J., 1978)を著した。そのなかで、現代アメリカの黒人問題の認識の変更、すなわち「人種」から「階級」への視座の転換の必要を説いて、研究者、政治家、ジャーナリストのあいだにホットな議論を喚起した。次いで九年後、『本当に不利な立場に置かれた人々』(Wilson, W. J., 1987)を著した。ウイルソンは、そのなかで、インナー・シティに集住し、社会的混乱の渦中であえぐ最下層の黒人を「アンダークラス」(underclass)と呼び、社会的混乱の原因を分析して、採るべき社会政策の戦略を提起した。

## アンダークラス論争

ウイルソンが最下層の黒人研究の中心に位置づけたアンダークラス論は、アンダークラスの語の使用自体の是非を含めて、ホットな論争の発火点となった。そして、彼のアンダークラス論は、さまざまな角度からの批判に曝された。しかし、現代アメリカの最下層の黒人の生活実態を分析して、アンダークラスをめぐる言説を、最下層の黒人への偏見を煽り、烙印づけることしかなかったジャーナリズムの社会論評から、客観的で実証的な社会科学の俎上に乗せ、それに基づく政策提言とともに、社会的に孤立する最下層の黒人の境遇にあらためて世の真摯な関心を喚起したという点で、ウイルソンの功績は大きい。『本当に不利な立場に置かれた人々』は、著者ウイルソンの名およびアンダークラスの語とともに、アメリカの国境を越え、日本はもとより、ヨーロッパ、中南米、アジアの失業・貧困・犯罪・福祉の都市問題に取り組む研究者や政治家や運動家の脳裏に刻まれていった。ウイルソンのアンダークラス論を基点として、アメリカで、いくつものアンダークラス論が登場した。それらは、たがいに一部重なりあい、しかもそれぞれが、論争の経過とともに、解釈や論点をスライドさせるなど、複

雑な関係にある。そのことを承知の上で、アンダークラス論を分類すると、大きく三つの立場に分けることができる。まず、アンダークラスの語の倫理的な危険を主張する立場がある。また、その語の学問的な存在意義を否定する立場も、このグループに入る。次に、黒人集住地域の社会問題の分析用具としてアンダークラス概念の意義を認める立場がある。それは、さらに、最下層の黒人の行動や規範、価値こそがアンダークラス形成の主たる原因だとする立場（行動規定派）、すなわち（新）保守派(3)と、彼・彼女らが置かれた経済・社会構造こそがアンダークラス形成の主たる原因だとする立場（構造規定派）、すなわちリベラル派に分けることができる。この分類に従うならば、ウイルソンは、構造規定派の旗頭の位置に立つことになる(4)。もちろん、彼も、最下層の黒人の行動、規範、価値の「逸脱性」に言及はした。しかし、それは、最下層の黒人が置かれた経済的・社会的な境遇に対する彼・彼女らの適応の所産にすぎないとされた。

ウイルソンは、アンダークラス論争において、次のような立場をとる(5)。すなわち、一九七〇年代以降に顕著になったインナー・シティの社会的混乱は、何よりも、産業都市の経済構造の変容とともに生じたものであり、

次いで、一九六〇年代に始まるアフアーマティブ・アクション政策の帰結としてあった。最下層の黒人の失業の増加と生活の崩壊という事態は、まさに彼・彼女らを極度の貧困から救出するはずであったアフアーマティブ・アクション政策を称揚してきたリベラル派にとって、意図せざる結果であった。しかし、リベラル派の研究者たちは、この事態を前にしてなお、インナー・シティの現実を直視して、その実態と原因を分析することを躊躇した。そして、アフアーマティブ・アクション政策を擁護し、さらなる充実を、と要求するばかりであった。

これに対して、ミュラーに代表される保守派の研究者たちは、黒人集住地区にみる異常な失業の増加は、最下層の黒人の仕事が減ったからというよりも、彼・彼女らのあいだの、働き甲斐のない仕事を次つぎに転職するという態度や、働かなくても福祉の給付でやっていけるような過剰な社会政策によってもたらされたものだと主張した(Murray, C., 1984)。そして、温情的なアフアーマティブ・アクション政策は、最下層の黒人の労働への消極的関与と福祉への依存を常態化させて、政策の思惑とは反対に、彼・彼女らに自立を促し社会の主流に組み込むのを阻む役割しか果たさなかったとした。こうして、ミュラーは、アフアーマティブ・アクション政策の廢

止を主張した。ステイールは、(中流階級の黒人の立場から)アフアーマティブ・アクションの優遇政策があるために、黒人は(被)差別の精神構造からいつまでも自由になることができないとして、政策の廢止を主張した(Steele, S., 1990)。

この結果、アンダークラス論争は、最下層の黒人の態度と行動を暴いて政策批判を行ない、個人の自助努力と福祉予算の削減を主張する保守派の主導のもとに進んでいった。

これに対して、ウイルソンは、リベラル派と保守派の双方の立場を批判した。彼は、インナー・シティの荒廃がこれまでにない規模で進行していること、そのなかでアンダークラスと呼ぶべき新たな最下層の黒人層が形成されてきたこと、アンダークラス形式の原因の一つが、中流階級や労働者階級の黒人に優先的に恩恵をもたらす結果になったアフアーマティブ・アクション政策にあったことを認めるべきだとして、リベラル派を批判した。

そして、返す刀で、インナー・シティの荒廃とアンダークラスの形成の最大の原因は、最下層の黒人が置かれた一九七〇年代以降の経済構造の変容にあったのであり、彼・彼女らの態度や行動にみる道徳的な逸脱は、大量失業をもたらした経済構造の変容の反映にすぎなかったし、

また実際に、福祉が黒人の労働意欲を削いで福祉への依存を増大させたなどという証拠はどこにもないと、保守派を批判した。その上で、ウイルソンは、みずからは社会民主主義の立場に立つと表明して、インナー・シティの社会的混乱を解決するためには、人種マイノリティの成員を一括して優遇するような福祉政策でなく、いかなる人種であれ、失業と貧困にあえぐすべての人を実質的に救済するような社会政策、そしてそのような政策を本当に効果的にし、また広範な国民に積極的に支持されるような根本的で包括的な経済政策こそ施行されるべきだと主張した。

後に、ウイルソンは、一九九一年のアメリカ社会学会の会長講演において、構造規定派の立場から、それと行動規定派の立場の統合を意図して、最下層の黒人の社会問題を包括的に分析するための統一的な枠組の提案を行なった (Wilson, W. J., 1991a, p. 6 & 1991b, p. 462)。とはいえ、そこに特段の理論的展開がみられたわけではないが。

## アンダークラスの形成

では、アンダークラスは、具体的に、どのように形成

されたのだろうか。ウイルソンは、次のように主張した。一九七〇年代に入り、北東部や北中部の大都市圏の中心都市 (ニューヨーク、シカゴなど) において、インナー・シティに住む黒人の失業が異常に増加した。その結果、婚外子出産・薬物依存・犯罪・福祉依存などの社会問題が深刻化し、それらの地区がコミュニティとして解体して、孤立していった。このような、最下層の黒人の生活と地域を荒廃させた最大の原因は、異常に増加した失業にあった。すなわち、アメリカ経済が脱工業化されるにともない、北東部や北中部の伝統的な中心都市では、産業構造において、製造業が撤退し、地方や外国へ拡散していき、この間隙にサービス産業が膨張していった。このため、一方で、中流階級や労働者階級の黒人は、製造業の拡散およびサービス業の膨張とともに、インナー・シティから市街住宅地や郊外へ移住していった。他方、低学歴で未熟練の若い黒人男性の多くは、この産業構造の変容のなか、父親世代が就いていた製造業の未熟練職種の仕事を失うことになり、膨張するサービス業に新たな就業機会を開拓する社会的資源ももたず、さらに、拡散した製造業の未熟練職種を追って移住することもできず、インナー・シティに滞留していった(6)。

この結果、仕事をもち生活が安定し、結婚して家族を

支えることができるような男性 (marriageable male) が減っていった。そして、インナー・シティの多くの女性が、一〇代で妊娠するものの、生活力のないパートナーと結婚することができず、婚外子出産をなし、母子家庭として要扶養児童家族援助 (AFDC) などの福祉に頼って生計を支えることになった。このように、若い黒人男性の失業は、彼らを、一方でパートナーの女性とともに福祉への依存に追いやり、他方でアンダーグラウンドな経済活動へ追いやって、薬物依存や犯罪などの逸脱的な行動へ駆り立てていった。

また、アフアーマティブ・アクション政策は、たんに黒人であるかどうかだけを基準として教育や就業や昇進の機会を割り当てて保障したがために、もっぱら、最初からそのような保障に應じることのできる学歴や熟練の資格をもった中流階級や労働者階級の黒人の生活機会を大幅に拡大することになった。そのことがまた、彼・彼女らのインナー・シティから市街住宅地や郊外への移住を促した。そして、彼・彼女らによって支えられていた学校・教会・商店・銀行などの社会施設も、機能を停止していった。また、中流階級の黒人が近隣からいなくなつたことで、若い黒人たちは、人生目標として準拠すべき、社会の支配的価値を担う成功者のモデルに身近に

接する機会を喪失していった。その結果、彼・彼女らは、逸脱行動の選択を押し止めるような社会的緩衝 (social buffer) をなくし、薬物依存、犯罪などにいつそう走っていった。こうして、社会的に孤立した (social isolation) インナー・シティに、荒廃したコミュニティ生活の悪影響だけが集中していった。

要するに、中心都市の産業構造の変容は、一方で新たな熟練・専門的職種を創出し、他方で未熟練職種を激減させて、黒人マイノリティの階級的な両極分化を加速した。このような、インナー・シティの社会的混乱のただなかに取り残され、社会政策においても一時的な生活保障以外に、「本当に不利な立場」に置かれていった最下層の黒人を、ウイルソンは「アンダークラス」と呼んだ。ウイルソンの主張は、さらに続く。このようなインナー・シティの社会的混乱を鎮めるためには、なによりも、最下層の黒人 (男性) の失業問題が解決されなければならない。そのためには、職業訓練や厚生福利などの労働政策が充実されなければならないだけでなく、究極には、社会全体の持続的な完全雇用を達成するような根本的で包括的な経済政策、すなわち産業政策や労働市場政策が施行されなければならない。また、今日のインナー・シティにみる失業・貧困・慢性的な福祉依存など

の社会問題は、一九七〇年代以降の経済環境がもたらしたものであり、したがって深刻な影響を被ったのはなにも黒人だけではない。ヒスパニック系マイノリティはもとより白人でさえ、その最下層の部分は同じ影響を被って、失業・貧困・福祉依存の状態に陥った。ゆえに、インナー・シティの社会的混乱を黒人マイノリティに限って捉える必要性はないのであって、その意味で、すでに「人種の意味」は後退した。今や、社会的混乱の解決のための政策は、人種が何であれ、実質的に極度の貧困状態にあるすべての人に資するようものでなければならぬ。

このようなウイルソンの主張は、多くの共鳴者を獲得していった。アンダークラス概念を科学的概念として定立し、具体的な現実分析に適用し、もって現代の黒人問題の本質をあきらかにして、政策提言を行なったウイルソンの功績は否めない。しかし同時に、彼の主張は、さまざまな角度からの批判を招くこととなった。ウイルソンもまた、それらの批判を行なってきた。以下、筆者が参照できた文献の範囲で、あれこれの論者によって出されたウイルソン批判の主要な論点を要約し、検討する。かたちで本稿を進めたい。もって、アンダークラス論争の全体を俯瞰するための一助としたい。ただし、論

争は、アンダークラスの実態の膨大な実証研究と細密な解釈論議の競り合いから成っている。本稿では、実態の分析と解釈、さらに調査方法の妥当性かんの細部にまで分け入って検討する余裕はない。

### アンダークラスの語の危険

まず、アンダークラスの語につきまとう倫理的な危険についてである。アンダークラスの語は、一九六二年、ミユルダール (Myrdal, Gunnar) によって、経済の脱工業化にともなう失業と貧困のためホームレス、物乞い、スリ、薬物依存者、犯罪者などに陥った人々を指す語としてはじめて用いられた。その後、アンダークラスの語は、貧しい黒人に対する世間の偏見に乗じたマスコミなどによって、みずから自堕落に逸脱行動を繰り返すばかりの「(社会の保護に) 値しない貧困者」(undeserving poor) という意味に転化され、流布されていった。

ここで、〈アンダー〉の語には、たんに「もともと」下層という階層規定に留まらず、「地位が低く、受動的、服従的であると同時にたちが悪く、危険で、破壊的で、暗く、邪悪で、地獄さえも想像させる」というような、露骨な価値低下が含意されている (Peterson, P. E., 19

91, p. 3) (7)。

ガンスは、このようなアンダークラスの語をめぐる経緯を念頭に、最下層の黒人の生活態度や行動を非難して「階級外の階級」(under-class)とか、社会的な従属と道徳的な荒廃を永遠に脱け出せない現代の「カスト」であるかのように烙印することは、社会の矛盾の犠牲者を責める「やり方だと批判した」(Gans, H., 1990 & 1995, p. xi) として、そのような危険が織り込まれたアンダークラスの語は、科学用語として不適当だと主張した。カツツもまた、あれこれの黒人集中地域についてのモノグラフは、それらの地域にもさまざまな階層や範疇の人々が住んでいることをあきらかにしており、これらの人々をアンダークラスとして一括することは、実態の上からも間違いだと主張した (Katz, M. B., 1993, p. 21)。そして、カツツは、アンダークラスの語は、インナー・シティの変容のメタファーとして以上にまともって括り上げるべき知識の実体をもたないとして、その語の科学用語としての根拠に疑問を付した。ジェンクスは、アンダークラスと下層階級 (lower class) 一般の差異はしよせん「程度の問題」でしかなく、アンダークラスがあたかも社会外の「特異な」人々であるかのようにみなす理解は間違いであると主張した (Jencks,

1991, p. 28)。

このような批判を受けて、ウイルソンは、前掲のアメリカ社会学会の会長講演において、アンダークラスの語の倫理的な危険を認め、その語に替えて、インナー・シティにあって異常な失業や極度の貧困や社会的孤立の状態に置かれた人々を指す語として、ヘットターの貧困者 (ghetto poor) の語を用いることを提案した (Wilson, W. J., 1991a, p. 6) (8)。

次に、同じ脈絡において、アンダークラス概念の再定義やその下位類型の構成がめざされた。そもそも、概念のあいまいさがアンダークラスの語にステレオタイプ的な偏見を侵入させてきたというわけである。ウイルソンは、アンダークラス(ないしゲットターの貧困者)は、下層階級とは階層的に区別されて、貧困率(貧困線 poverty line 以下の生活水準にある人々の割合)が四〇%以上という極貧地区に住む人々であると定義づけた (Wilson, W. J., 1991b, p. 475)。ポーターソンもまた、アンダークラス概念はウイルソンのいう極貧地区(ゲットター)住民の、さらに一部の人々にしか当てはまらないと主張した (Peterson, P. E., 1991, p. 24)。コーンブルムは、アンダークラス概念には労働者階級からの一時的な脱落者などは含まれないのであり、社会政策の保障



なくしてはどうしても自立できないような、貧困者のなかでもごく少数の人々を指すにすぎないと主張した (Kornblum, W., 1991, Pp. 209—211)。やうに、ジェンクスは、人々はさまざまな原因を抱えてアンダークラスになるのであり、アンダークラスへのステレオタイプを防ぐためには、それらの原因を識別し、腑分けしなければならぬと主張した。そして、アンダークラスの人々を、原因ごとに、所得水準が低い人 (impoverished underclass)、所得源が不安定な人 (jobless underclass)、教育と熟練がない人 (educational underclass)、子に責任をもたない人 (reproductive underclass)、および暴力や犯罪に依存する人 (violent underclass) に分類した。もって概念の明晰化を行ない、それぞれのタイプには異なる社会政策が実施されなければならないと主張した (Jencks, C., 1991, pp. 29—30)。

### 人種問題か階級問題か

次に、ウイルソンは、現代アメリカの黒人問題における「人種差別」の側面を軽視しているという批判についてである。ウイルソンは、インナー・シティの社会的混

乱の最大の原因を、脱工業化段階における産業構造の変容による未熟練の黒人(男性)の大量失業にあるとしたところで、脱工業化段階における産業構造の変容が最大の原因だとかぎり、その被害者はなにも黒人マイノリティだけではなくは限られない。ヒスパニック系マイノリティはもとより白人でさえ、その最下層の部分は、同じく深刻な影響を被ったからである。こうして、都市の貧困における「人種の意味」は後退した。ウイルソンは、このような認識に基づいて、社会的混乱を鎮めるためには、人種が何であれ、極貧生活にあえぐすべての人を救済するような雇用政策が必要であると主張した。

では、ならば、なぜ失業はインナー・シティのとりわけ黒人のあいだで急速かつ異常に増加したのだろうか。ウイルソンは、それは黒人労働力の中心をなす若い黒人男性に学歴と熟練がなく、労働市場の変容に適応できなかったからだという。ならば、なぜ学歴と熟練がない若い黒人がインナー・シティに集中することになったのだろうか。ウイルソンは、それは南部の農村から北部の都市へ学歴も熟練ももたない若い黒人が大量に移住した結果であったという。つまり、黒人が歴史的に置かれた人口の位置の移動という生態学的な事情にあったという。

たしかに、インナー・シティに学歴も熟練もない若い

黒人が集中した経緯には、歴史的な〈人種差別〉が介在している。ならば、今日のアンダークラスの形成において〈人種差別〉はまったく介在していないのだろうか。「人種の意味は後退した」と言い切ることができるのだろうか。ウイルソンへの批判は、この点に集中することになる。ケルソは、極貧層の人口の実数は白人の方が多いものの、彼・彼女らは白人のなかでは少数で不可視な人々でしかない、これに対して、アンダークラスとして顕在化し、烙印されたのは、限られた地区に極貧層が集中する黒人の方であったと主張した (Kelso, W. A., 1994, p. 29)。ハッカーは、「社会学者にしてもジャーナリズムにしても、貧しい白人を(最下層の)『階級』とは本気で認めがらない。その理由は大部分が人種的なものだ。白人にとって、貧困は一時的で、偶然的なものともみられる傾向がある。黒人にとっては、貧困はその歴史と文化からみて当然の結果であるかのようにみられている」と主張した (Hacker, A., 1992, 上坂訳 一五七頁)。ただし、インナー・シティの黒人の状況は、「当然の結果であるかのようにみられている」だけに留まらない。そこには、経済構造の変容に適應する社会資源をもたない黒人がとりわけ深刻な被害を被っていた固有の事情がある。

たしかに、実際、貧しい白人はもとより他の人種・民族マイノリティの人々には、多かれ少なかれ、アンダークラスの地位から抜け出す機会があったのに対して、貧しい黒人にはその機会がほとんどなかった。この意味で、この相違をすべての人が等しく受けた経済環境(のみ)に還元するウイルソンの説明は、飛躍といわざるをえない。もっとも、ウイルソンは、過去の黒人差別の痕跡が現在もなお残存しており、それが黒人の境遇の再生産に機能していることに言及はしている。にもかかわらず、彼において、アンダークラス形成の根本に関わる要因として、黒人差別の側面が位置づけられているわけではない。

また、ウイルソンは、インナー・シティの社会的混乱のもう一つの原因は、アフアーマティブ・アクション政策が中流階級や労働者階級の黒人に優先的に恩恵をもたらした結果、彼・彼女らがインナー・シティから郊外へ転出したことにあると主張した。この点について、マッセイらは、次のように批判した。すなわち、中流階級や労働者階級の黒人もまたけっして人種差別から解放されてはいない、彼・彼女らの郊外への移住は黒人マイノリティに対する差別的な住宅政策によって阻まれた、そのため、結局、彼・彼女らはインナー・シティかせいぜい

その周辺に留まらざるをえなかった、したがって、インナー・シティに住む最下層の黒人は、ウイルソンが言うほどには社会的に孤立していない、というものである

(Massey, D. S. 1990, p. 330) (Kriyo, L. J. et al.

1998, p. 76)。彼らは、居住差別こそが最下層の黒人を

インナー・シティに閉じ込めていったのであり、社会的混乱を来たして、アンダークラスを形成していった最大の原因は、ウイルソンのいう失業問題でなく、居住差別にあったと主張した (Massey, D. S., 1990, p. 354)。ただし、ここには、中流階級や労働者階級の黒人の居住移動に関する資料の範囲の問題があり、この主張をただちに一般化できるかどうかは、検討の余地がある。

さらに、ウイルソンは、アフアーマティブ・アクション政策のように、もっぱら人種マイノリティの成員に対してだけ適用される福祉政策は、政治的に持続させることが困難であり、そのような特定グループの優遇政策は、失業や貧困を解消するための根本的で包括的な経済政策にとって二義的な意味しかもたないと主張した。そして、中流階級の白人もまた積極的に支持できるような普遍的な福祉および経済政策を進めてこそ、特定のマイノリティだけを利する福祉もまた結果的に支持されることになる」と主張した。このように、ウイルソンは、黒人問題

において「人種の意味は後退した」と説いたのに続いて、黒人問題の解決においても「人種政策の意味は後退した」と説いたわけである。

しかし、批判者たちは、インナー・シティの最下層の黒人の悲惨な境遇を黒人差別のパスpekティブから解読しながら、このようなウイルソンの主張に反論した。カッツは、ウイルソンは人種要因より階級要因が重要だとするが、そのような実証的かつ理論的な根拠はなお充分に示されていないと批判した (Katz, M. B., 1993, p. 20)。フィーギンは、中流階級や労働者階級の黒人もまた、いかに最下層の黒人より恵まれているとはいえず、

就業や昇進や居住において深刻な差別を被っており、過去の差別は今日姿を変えて黒人マイノリティ全体にかかっているのであり、ウイルソンはその現実を正当に見ていないと批判した (Feagin, J. R., 1986, p. 182)。

たしかに、ウイルソンは黒人マイノリティ内部の階級的な両極分化を強調するあまり、黒人マイノリティ全体に対して人種差別の圧力がかかり、それがとりわけ最下層の黒人に重くのしかかったという事実を一举にネグレクトした。そのウイルソンの論理は、黒人差別の現実に照らすかぎり、飛躍といわざるをえない。

## ウイルソンの思惑

ウイルソンは、特定の人種マイノリティを対象とする政策でなく、人種が何であれ、「本当に不利な立場に置かれた人々」の失業と貧困の問題を実質的に解決するよきな政策こそ必要だと主張した。ここで、人種が何であれ、「本当に不利な立場に置かれた人々」を実質的に救済する政策を、というウイルソンの主張には、アフアーマティブ・アクション政策に胎まれた欠陥を、「被害者を責める」かたちの保守派の立場からでなく、「左」すなわち社会民主主義の立場から乗り越えたいという動機があったかにも見える。「一部の人々だけが得をしている」とか「他人のために税金を払っている」というような、納税者の多数派である白人のアフアーマティブ・アクション非難の奥には、黒人マイノリティに対する人種偏見ゆえの妬みの感情があったことを、黒人学者ウイルソンは憂えていたかにも見える。実際、ウイルソンは、最下層の黒人の失業や貧困や福祉依存が彼・彼女らの価値観や行動様式によるものだから「自業自得」だとする保守派の主張を激しく批判した。また、「本当に不利な立場に置かれた」アンダークラスには、最下層の黒人のみならず他の人種マイノリティや白人の最下層の部分さえ含

まれるとしながら、ウイルソンが、実質、分析のターゲットにしたのは、黒人マイノリティであった。包括的な経済改革の要求も、黒人問題という「隠れたアジェンダ」に対する国民の合意を取り付けるためのものであった。要するに、ウイルソンの関心は、あくまでも最下層の黒人であったわけである。しかしながら、このような関心にもかかわらず、彼は、最下層の黒人を対象とする特別の社会政策を政策提言の中心に据えていない。このようなウイルソンの関心と主張の乖離のうちに、アフアーマティブ・アクション政策がもたらした結果への深い失望と、それをラディカルに乗り越えて最下層の黒人を救いたいという焦りが見え隠れしている。

ところで、ウイルソンは、持続的な完全雇用が達成されて、黒人の最下層がヒスパニック系マイノリティや白人の最下層の部分と分かち合うパイ、すなわち、仕事量さえ充分に大きくなれば、黒人の失業と貧困はおのずから解決されると主張した。しかし、このウイルソンの論理は、飛躍といわざるをえない。というのは、資本主義体制の経済状況がよければすべてよしという主張からは、最下層の黒人を救済するための具体的で実践的な政策指針を導き出すことができないからである。かりに持続的な完全雇用が最下層の黒人の失業および貧困の解決の究

極の策であるにしても、それを達成する経済政策とは、アメリカ資本主義の国際競争力や基本的な経済制度の改革に関わる問題であり、その意味で、そもそも持続的な完全雇用の達成自体、至難のことである。ダスターは、ウイルソンは人種差別の問題を顧慮することなく、ただ新たな仕事の創出という一般戦略を引き出しただけだと言ひ、むしろ、一般的な経済政策を強調することによって、彼みずからの意図に反して、最下層の黒人に対する制度的差別の事実を容認する結果となつてしまつたと批判した (Duster, T., 1988, pp. 288-289)。

### 論争の意味

ウイルソンの主張をめぐる批判と擁護の論争の経緯は、この他、簡単な要約に尽きない(9)。そして、論争に触発されて、インナー・シティの最下層の黒人の生活実態について多くの実証研究が出され、アンダークラス論争の全体が領導されてきた。ウイルソン自身も、論争に積極的にコミットしてきた。とはいへ、なお、彼のアンダークラス論に内在する問題点が充分に反駁されてきたとはいいがたい。ウイルソンの問題点とは、要するに、人種差別の要因の軽視ということに尽きる。ウイルソンは、

黒人マイノリティのための社会政策に対する白人納税者の批判を回避するために、最下層の黒人の根本的な救済策を練るとして、包括的な経済政策の必要を説いた。しかし、ここで本当に必要であつたのは、アンダークラスの形成における「人種」(および福祉政策)と「階級」(および経済政策)の関係を正面に見据え、それらの境界上の諸相をあきらかにし、もつて問題の二面性を統一的に把握することであつた。そのためには、「人種」と「階級」の関係を説明するための新たな概念枠組が構成されなければならない。ここでふたたび、「人種」と「階級」の関係いかんという、アメリカの黒人問題研究の古くて新しい課題が、アンダークラス問題という今日的な装いをもつて登場してくる。

集団内部が大きく階級分化した黒人マイノリティの生活実態にみる「人種」と「階級」の関係を統一的に把握する試みは、すでにいくつか行なわれてきた。古い例では、たとえば、ホリングスヘッドは、黒人一人ひとりの社会的地位は水平的分化(階級)と垂直的分化(人種)が交錯する社会空間の区画化 (compartmentalization) において決定されるとして、黒人の人種および階級による具体的な地位決定のメカニズムを構造的に把握しようとした (Hollingshead, A. B., 1952, p. 685)。

ゴードンは、ミュルダールやウオーナー (Warner, Lloyd W.) らの考えを受けて、エスニック (ethnic 民族) の語と階級 (class) の語を合成し、エスクラス (ethclass) という語を創り、「人種と階級」の関係を概念的に把握しようとした (Gordon, M. M., 1978, pp. 134-136)。これらと同様、アンダークラス問題の分析においてもまた、「人種」と「階級」の概念図式があらためて構成されなければならない。

ウイルソンの問題提起を口火とするアンダークラス論争は、なお進行中である。世界経済と国内経済の変動のなか、最下層の黒人の生活と経済環境は、どんどん変化していく。また、彼・彼女らの悲惨な生活が存続し、「本当の」問題解決の政策が施行されて効をなさないかぎり、アンダークラス論争が収束することはありえない。そして政治的にも、アンダークラス論争は、今や、黒人問題を越えて、現代アメリカ社会そのものの診断学となっている。

### アンダークラスと都市下層

アンダークラスの語は、アメリカの黒人問題を越えて世界に知れ渡った。そして、世界経済のグローバリゼー

ションのもと進行しつつある、ヨーロッパ諸国の都市階級構造の分極化とそこから生起する新たな貧困階級を分析する用具として、アンダークラス概念を拡大し適用する可能性が模索されている。ウイルソンもまた、オランダにおけるアンダークラス研究の事例を掲げながら、現代の大都市に、長期に続く失業、極度の貧困、深い社会的孤立という境遇にある人々が生み出されるかぎり、アンダークラス概念を拡大してアメリカの状況と異なる世界の最下層の階級に適用することも、十分に可能だと主張した (Wilson, W. J., 1991a, p. 12 & 1993, p. 23)。

問題状況は、日本においても然りである。日本の大都市圏の中心都市は世界都市に変貌しつつある。経済構造は、製造業部門からサービス業部門へ変容しつつある。それにともない、労働市場も変容しつつある。一方で、サービス業職種が膨張し、他方で、建設・土木業、製造業のとりわけ未熟練型職種が激減しつつある。サッセンがニューヨークとロスアンゼルスについて描いた階級構造の分極化現象は、日本の都市において、アメリカほどの規模ではなくとも、劇的に進行している (Sassen, S., 1988, Chap. 5)。そして、それに長期的な景気後退が重なって、日雇労働者、野宿者、さらに失業者や阪神大震災難民や外国人労働者の下層部分を含めて、新たな

都市貧困層が現われ、社会問題として顕在化しつつある。しかも彼・彼女らは、差別の対象として社会的に烙印され、排斥されて、限られた都市空間に凝離された人々であり、その意味で、彼・彼女らは、たんに貧困であるというに留まらない被差別の固有の範疇、すなわち「都市下層」としてある。

このような都市下層にアメリカのアンダークラス概念を適用することで、都市下層の現代日本的特徴を分析し、説明することは可能だろうか。もとより、都市下層とアンダークラスは、それぞれが置かれた都市底辺の現実が異なる。都市下層では、アンダークラスほどに人口規模および社会的認知の度合が大きい。都市下層では、アンダークラスほどに人種・民族問題としての側面が大きくない。都市下層では、アンダークラスほどに政府・自治体による福祉政策の所産という側面が大きい。他方、都市下層もアンダークラスも、脱工業化という同時代の大都市に進行した産業構造と労働市場の変容のなか、収奪され、差別されて、インナー・シティ空間に凝離された最下層の階級として生まれた。

このような日本の都市下層とアンダークラスの差異と類似を踏まえて、双方を現代の世界都市に生起する共時的・相即的な二つの現象として理解することができるな

らば、都市下層へのアンダークラス概念の適用も、おおいに可能ということになる。そして、日本の都市下層を世界の経済・都市の脈絡において相対化することで、都市下層研究の新たな展開を得ることができるならば、それは結構なことである。しかし、そのためには、いったんアンダークラス概念を脱構築すること、すなわち、都市下層との差異要因をアンダークラス概念から取り除き、「最下層の階級」概念として一般化しつつ再構築するという作業がどうしても必要となる<sup>(10)</sup>。

#### 〈注〉

(1) インナー・シティとは、都心部およびそれに隣接する地域で、商業地か住宅地か、土地利用があいまいなまま放置され、都心再開発の対象としていずれ商業・ビジネス街に遷移していくような地帯をいう。

(2) 一九九二年にロスアンジェルズで暴動が勃発したが、このときの最大の被害者は韓国人で、逮捕された最大の人種集団はメキシコ人であった。アメリカの人種対立は、一九八〇年代以降、伝統的な白人対黒人の構図と合わせ、いくつもの人種対立が多元的に交錯する構図が現れている。

(3) 新保守派に対して、旧保守派とは、スラムの貧困はそ

の住民に内在化され、世代間に継承されて、容易にそこから抜け出すことのできない価値や規範に原因があるとする。ルイス (Lewis, Oscar) に発する「貧困の分化」(culture of poverty) 論者たちをいう。貧困を貧困者に内在するとされる価値と行動から説明するという点で、それは新保守派とつながっている。

- (4) 行動規定派の代表として、ミューラー (Murray, Charles) 、メード (Mead, Lawrence) 、ローリー (Loury, Glenn) などの研究者が挙げられる。構造規定派の代表として、ウイルソンの他に、ワッカント (Waquant, Loie J. D.) 、カサーダ (Kasarda, John D.) などの研究者が挙げられる。

(5) 以下、ウイルソンの主張の要約は『人種の意味の後退』『本当に不利な立場に置かれた人々』および本稿末尾に掲載の論文に依っている。ただし、ウイルソンについて、逐一の引用注記は省略する。

- (6) ワッカントとウイルソンは、シカゴの低貧困地区 (住民の貧困率が二〇%から三〇%のあいだにある地区) と超貧困地区 (貧困率が四〇%を越える地区) の住民の階級構成を比較した。彼らによれば、低貧困地区では、中流階級一一%、労働者階級五五%、失業者三四%という階級構成をとり、超貧困地区では、中流階級

六%、労働者階級三三%、失業者六一%という階級構成をとるとされる。超貧困地区の失業率の高さは、歴然としている (Waquant L. J. D. & Wilson, W. J., 1993, p. 35)。

リーと石田は、ロスアンジュルスを事例に、産業・労働市場・住宅市場の変容を分析して、ウイルソンの仮説を立証した (リー&石田、1995, p. 67-80)

- (7) アンダークラスの語は、比較的近年にアメリカに移住しながら、短期のあいだに学歴や職業や所得などの社会的地位を急速に上昇していった、韓国人や中国人など非白人の「ヘモデル・マイノリティ」の対語としてもある。モデル・マイノリティ概念もまた、人種・民族集団に対する (プラス方向の) ステレオタイプを内包している。

(8) ゲットーとは、元来、中世ヨーロッパ都市において、差別され、空間的に隔離されたユダヤ人居住地区を指したが、今日では、ユダヤ人のみならず、差別され、隔離された人種・民族マイノリティの都市の居住地区一般を指す。

(9) たとえば、カッツは、ウイルソンは失業問題を黒人男性についてのみ論じ、福祉依存の問題を黒人女性についてのみ論じるという、伝統的な性別役割分業観に



立っていると批判した(Katiz, M. B., 1993, p. 20)。そして、最下層の黒人女性の失業と貧困の解決は、アンダークラス問題のもう一つの重要な側面であり、彼女たちを労働市場へ連れ戻すことが問題解決の鍵となり、そのためには育児・休業保障などの制度が充実されなければならないとした。また、クリヴォらは、最下層の黒人女性の失業と貧困の問題を解決してはじめて、集住地区のコミュニティのネットワークや地域活動が再生されると主張した(Krivo, L. J. et al, 1998, p. 77)。

この他、婚外子出産の増加という現象は、ウイロンが言うような、黒人男性の失業が増加したことで「結婚可能な」男性層が縮小したためというよりも、婚外子出産をごく普通のこととみなすようになった現代の若者世代の価値観によるものだという批判も出された。これに対して、ウイロンは、黒人女性と白人女性の年齢階層別の結婚と離婚の動向の実態分析を行ない、黒人女性の結婚年齢は白人女性より高く、反対に、離婚した女性の再婚率は白人女性より低いが、そこにこそ黒人女性が置かれた特別の事情があるとして、若者世代の一般的価値による婚外子出産の増加という説明を反駁した(Wilson, W. J., 1987, Chap. 7)。

(10)日本の部落差別問題や在日外国人問題は、近年の都市

下層問題とは経緯や性格を異にする。ゆえに、アンダークラス概念の適用はなじまない。

#### 〈引用文献〉

- Duster, Troy, "From Structural Analysis to Public Policy", *Contemporary Sociology*, vol. 17, 1988
- Faegin, Joe R., "Book Review: The Truly Disadvantaged", *American Journal of Sociology*, vol. 94, no. 1, 1988
- Gans, Herbert J., "Deconstructing the Underclass: The Term's Danger as a Planning Concept", *Journal of the American Planning Association*, 56, Summer 1990
- Gans, Herbert J., *The War against the Poor: The Underclass and Antipoverty Policy*, BasicBooks, 1995
- Gordon, Milton M., *Human Nature, Class, and Ethnicity*, 1978, Oxford University Press
- Hacker, Andrew, *Two Nations: Black and White, Separate, Hostile, Unequal*, Robin Straus Agency Inc., 1992 上坂昇訳『アメリカの二つの国民

- 断絶する黒人と白人』明石書店 一九九四年
- Hollingshead, August B., "Trends in Social Stratification : A Case Study", *American Sociological Review*, vol. 17, no. 6, December 1952
- Jencks, Christopher, "Is the American Underclass Growing?", Jencks C. & Paul E. Peterson (ed), *The Urban Underclass*, The Brookings Institution, 1991
- Katz, Michael B., "The Urban 'Underclass' as a Metapher of Social Transformation", Katz, M. B. (ed), *The "Underclass" Debate : Views from History*, Princeton University Press, 1993
- Kelso, William A., *Poverty and the Underclass : Changing Perceptions of the Poor in America*, New York University Press, 1994
- Kornblum, William, "Who is the Underclass?", *Dissent*, April 1991
- Kriwo, Lauren J. & Ruth D. Peterson & Helen Rizzo & John R. Reynolds, "Race, Segregation, and the Concentration of Disadvantage : 1980-1990", *Social Problems*, vol. 45 no. 1, 1998
- Massey, Douglas S., "American Apartheid : Segregation and the Making of the Underclass", *American Journal of Sociology*, vol. 96, no. 2, September 1990
- Murray, Charles, *Losing Ground : American Social Policy, 1950-1980*, BasicBooks, 1984
- Peterson, Paul E., "The Urban Underclass and the Poverty Paradox", Jencks, C & Peterson, P. E. (ed), *The Urban Underclass*, The Brookings Institution, 1991
- Sassen, Saskia, *The Mobility of Labor Capital : A Study in International Investment and labor Flow*, Cambridge University Press, 1988
- 森田 桐郎 他記『労働と資本の国際移動—世界都市と移民労働者』岩波書店 一九九二年
- Steele, Shelby, *The Content of Our Character, c/o Carol Mann Agency*, 1990 李隆記『黒く憂鬱—九〇年代アメリカの新しう人種関係』五月書房 一九九四年
- Waquant, Loic J. D. & Wilson, W. J., "The Cost of Racial and Class Exclusion in the Inner City", Wilson, W. J. (ed), *The Ghetto Underclass : Social Science Perspectives*, 1993

Wilson, William J., *The Declining Significance of Race : Blacks and Changing American Institutions*, The University of Chicago Press, 1978

Wilson, William J., *The Truly Disadvantaged : The Inner City, the Underclass, and Public Policy*, The University of Chicago Press, 1987

Wilson, William J., "Studying Inner—City Social Dislocation : The Challenge of Public Agenda Research", *American Sociological Review*, vol. 56, no. 1, February 1991a

Wilson, William J., "Public Policy Research and the Truly Disadvantaged", Jencks, C&Peterson, P. E (ed), *The Urban Underclass*, The Brookings Institution, 1991b

Wilson, William J., "The Underclass : Issues, Perspectives, and Public Policy", Wilson, W. J (ed), *The Ghetto Underclass : Social Science Perspectives*, SAGE Publications, Inc., 1993

リー・ジョン&石田弘「現代アメリカのエスニシティと階層」奥田道大編『コミュニティとエスニシティ』勁草書房 一九九五年

